

# 大学新入生における大学受験期の達成目標志向性と ソーシャルサポートがストレス関連成長におよぼす影響

—量的研究による検討—

竹ノ内 歩 加<sup>1)</sup>・原 口 雅 浩<sup>2)</sup>・江 村 理 奈<sup>2)</sup>

## 要 約

本研究の目的は、大学受験期における達成目標志向性とソーシャルサポートがストレス関連成長に及ぼす影響を検討することである。大学1年生243名を対象に質問紙調査を行った。階層的重回帰分析の結果、熟達目標が低い人に家族サポートがあるとストレス関連成長の「他者との関係」につながっていた。また、遂行目標が高い人には先生のサポートがあると「新たな可能性」に、遂行目標が低い人に友人サポートがあると「新たな可能性」につながっていた。大学受験の経験をストレス関連成長につなげるためには、達成目標志向性に応じたソーシャルサポートが必要であることが示された。

**キーワード：**ストレス関連成長、達成目標志向性、ソーシャルサポート

学校基本調査（文部科学省，2020a）によると，18歳人口は，1990年代の前半には200万人を超えていたが，その後少子化が進み，2000年代後半から120万人前後で推移している。また平成31年度の大学（学部）入学志願者数は約67万であるのに対し，大学（学部）の入学人数は約63万人であった。このように，現代は進学先の大学を選択しなければ希望者全員が大学に進学ができる「大学全入時代」である。

18歳人口が減少している一方，大学志願者数は，近年68万人前後で推移しており，令和2年度の大学・短大進学率は過去最高の58.5%（大学（学部）進学率は55.8%）であった（文部科学省，2020b）。文部科学省（2020c）が発表した平成31年度の入学志願者数と入学人数の割合によると，志願倍率は国立大学が4.0倍，公立大学が5.3倍，そして私立大学は9.4倍であった。

また，大学受験生は非受験生と比較してストレス反応が有意に高く（小山，2000），大学受験生が持つ「志

望大学に合格するのに必要な学力と自分の現在の学力とのギャップ」は，「いらだち感」，「不安感・あせり」，「疲労感」，「憂うつ感」，「神経過敏」と強い関連があった（小山，2001）。さらに，厚生労働省（2014）による平成26年度全国家庭児童調査によれば，高校生の62.3%が何らかの悩みや不安を抱え，その84.7%が自分の勉強や進路についてであった。これらのことから，受験は大多数の人にとって主要なライフイベントの一つであり，大きなストレス経験であると言える。

一方，小山（2003）は大学受験には，「忍耐力・精神力の向上」「自己受容の向上」「友達関係の親密化」「勉強に対する動機づけの向上」「将来に対する熟考」というプラスの側面があることを報告している。さらに，堀井（2018）は，大学生の大学受験の捉え方の1つに，「達成・成長経験」があることを見出し，大学生は大学受験に対して達成感を抱き，自分の成長につながるものとして捉えていることを示唆している。

1) 久留米大学大学院心理学研究科

2) 久留米大学文学部心理学科

このように、危機的な出来事やストレス体験によってもたらされる肯定的な心理的変容はストレス関連成長 (stress-related growth) あるいは外傷後成長 (post traumatic growth) と呼ばれている (Park, Cohen, & Murch, 1996, 飯村, 2016a)。人生の危機を経験した人のうち50%以上の人はその出来事を通じて何らかの肯定的な変容があったことが報告されている (Schaefer & Moos, 1992)。肯定的な変容として、「他者との関係」、「新たな可能性」、「人間としての強さ」、「精神的変容」、「人生への感謝」(Colhoun & Tedeschi, 2006 宅・清水監訳, 2014) の側面がある。

本研究では、ストレス関連成長を「大学受験期に、心理的なもがきや葛藤、行動した結果生じる肯定的な変容」と定義する。このストレス関連成長に影響を与えるものとして、達成目標志向性があると考えられる。

達成目標理論 (achievement goal theory) は、達成状況において、人が持つ目標 (達成目標志向性) の違いが、課題への取り組み方、感情、課題のパフォーマンスの違いを生むとする理論である (中間, 2016; 村山, 2003; 上淵・川瀬, 1995)。達成目標志向性には、学ぶこと自体を目標とし、努力することは自分の能力を向上する上で重要であるとする「熟達目標」、他の人に自分の有能さを示すことを目標とし、努力することに価値を見出さないという志向性を指す「遂行目標」(Ames & Archer, 1988)、最小限の努力によって課題からうまく逃れ、学習状況からの回避を目指す「課題回避目標」(Nicholls, Patashnic, & Nolen, 1985) がある。ストレス関連成長はもがきや葛藤の結果生じ (宅, 2010)、達成目標志向性によって学習行動が変化する (Elliot & Dweck, 1988) ため、ストレス関連成長につながりやすい達成目標志向性があると考えられる。

さらに、ストレス関連成長はソーシャルサポートと関連があることが指摘されている (Schaefer & Moos, 1992; 浦崎・森川, 2019)。ソーシャルサポートとは、「ある人を取り巻く重要な他者 (家族, 友人, 同僚, 専門家など) から得られる様々な形の援助」であり、「サポートの受け手の問題に対する解決を支援する『道具 (手段) 的サポート』と、受け手の悩みや苦しみを受容・共感する『情緒的サポート』がある」(久田, 1987)。また周りの人と活動することで緊張状態が低減する『共行動的サポート』がある (川原, 1994)。ソーシャルサポートは、生活上のさまざまな出来事 (ストレッサー) が心身の健康に及ぼす悪影響を緩和しうる要因であり (浦, 1992), Prati & Pietrantoni (2009)

によるメタ分析の結果、中程度の効果量があり、ストレス関連成長と正の関連がみられている。

そこで、竹ノ内・原口・江村 (2020) は、大学受験期にストレス関連成長に結びつきにくい達成目標志向性を持っていたとしても、ソーシャルサポートによってストレス関連成長につながられるのではないかと考え、達成目標志向性とソーシャルサポート及びその交互作用がストレス関連成長に及ぼす影響を検討した。階層的重回帰分析の結果、達成目標志向性では熟達目標が、ソーシャルサポートでは家族、先生、友人すべてのサポート源のサポートがストレス関連成長につながっていた。また達成目標志向性とソーシャルサポートの交互作用については、熟達目標が高い人は家族サポートが、遂行目標が高い人は友人サポートがストレス関連成長につながっていた。課題回避目標が高い人については家族サポートがないとストレス関連成長につながっていなかった。これらの結果は、達成目標志向性がストレス関連成長に影響を及ぼすこと、ストレス関連成長につながりにくい遂行目標、課題回避目標を持っていても、ソーシャルサポートを受けられれば、ストレス関連成長が生じることを示唆している。

しかし、竹ノ内他 (2020) は大学1, 2年生の10月に調査を行っており、大学受験を経験してから時間が経過していた。そのため、大学での満足度などの受験期以外の大学生活の要因も影響していることが課題として挙げられた。また、ストレス関連成長は、時間がたってからその時の自分自身を振り返り評価し直すことで自分の経験が今の自分につながっている面があることに気づき、高まることが指摘されている (宅, 2014)。竹ノ内他 (2020) において大学1年生は約半年、大学2年生は約1年半、大学受験の経験を振り返る期間があったことになる。したがって、ストレス関連成長の感じ方や質問紙での評価が、大学受験の経験直後と異なる可能性が考えられる。

そこで本研究では、大学受験を経験したばかりの大学1年生の初期に質問紙調査を実施し、達成目標志向性とソーシャルサポート及びそれらの交互作用がストレス関連成長に及ぼす影響を量的に検討することを目的とする。

## 方 法

### 調査協力者

九州圏内の3大学 (A～C) で調査を行った。A大学においては大学1年生の178名を対象に調査を行っ

た。分析対象者は、同意が得られなかった人、回答に不備があった人、ダミー項目を間違えた人などを除いた122名 ( $M=18.2$ ,  $SD=0.51$ ) であった。性別は男性59名、女性61名、無回答2名であった。B大学においては大学1年生の39名を対象に調査を行った。分析対象者は、35名 ( $M=18.1$ ,  $SD=0.35$ ) であった。性別は男性6名、女性29名であった。C大学においては大学1年生の26名を対象に調査を行った。分析対象者は、17名 ( $M=18.3$ ,  $SD=0.42$ ) であった。性別は男性8名、女性9名であった。

## 質問紙構成

### 1. フェースシート

学年、年齢、性別、現在在籍している大学の入試区分を尋ねた。性別は男性、女性、その他から選択してもらった。

現在在籍している大学の入試区分は、A大学においては、総合型選抜(AO)、指定校推薦、一般推薦、スポーツ推薦、一般前期、センター/センタープラス、一般後期、その他から選択してもらった。B大学、C大学においてもそれぞれの大学で実施されている入試区分に合わせて選択肢を作成した。

### 2. 達成目標志向性

光浪(2010)の目標志向性尺度を使用した。「熟達目標」6項目、「遂行接近目標」8項目、「遂行回避目標」3項目の3下位尺度、17項目から構成されている。大学受験期の高校3年生の時(浪人生の時を含む)を思い出して、「全く当てはまらない」「当てはまらない」「当てはまる」「非常に当てはまる」の4件法で回答を求めた。本研究では「遂行接近目標」を遂行目標、「遂行回避目標」を課題回避目標と表記している。

### 3. ソーシャルサポート

細田・田嶋(2009)のソーシャルサポート尺度を使用した。「道具的サポート」6項目、「情緒的サポート」4項目、「共行動的サポート」5項目の3下位尺度、15項目から構成されている。大学受験期の高校3年生の時(浪人生の時を含む)を思い出して、「全くなかった」「あまりなかった」「どちらともいえなかった」「時々あった」「よくあった」の5件法で回答を求めた。サポート源は飯村(2016b)を参考に、家族、先生、友人とした。

この尺度は、中学生を対象として作成された尺度であるが、大学生を対象とした研究でも用いられており(前田・大島・佐藤, 2017; 福岡, 2019), 大学受験期の高校生が経験すると考えられるソーシャルサポートを測定できる項目であることから、本研究でも使用し

た。

### 4. ストレス関連成長

宅(2010)の日本語版外傷後成長尺度から、受験では経験しないと考えられる「精神的(スピリチュアルな)変容及び人生に対する感謝」を除いた3下位尺度を使用した。「他者との関係」6項目、「新たな可能性」4項目、「人間としての強さ」4項目の14項目で構成されている。それぞれの項目について大学受験の結果、生き方にどの程度変化が生じたかを「全く経験しなかった」「ほんの少しだけ経験した」「少し、経験した」「まあまあ経験した」「強く経験した」「かなり強く、経験した」の6件法で回答を求めた。

### 5. ダミー項目

Googleフォームには、達成目標志向性とソーシャルサポートの先生サポートの設問の途中に三浦・小林(2015)を参考にダミーの設問を1項目ずつ挿入した。

### 手続き

A大学、B大学においてはGoogleフォームを使用して調査を実施した。WEB授業の際に、調査協力者に対して本研究の趣旨、倫理的配慮についての説明とGoogleフォームのURLを記載した文書を配布した。配布後1~2週間程度の期限を設けて、調査協力者の都合のいい時間に回答してもらった。調査の所要時間は10分程度であった。調査の実施時期はA大学B大学ともに2020年5月中旬から5月末であった。

C大学においては対面授業の際に質問紙を配布し、その場で回答を求めた。調査の所要時間は10分程度であった。C大学における調査の実施時期は2020年6月上旬であった。

なお、本研究は久留米大学御井学舎倫理委員会(研究番号381)の承認を得ている。

## 結 果

### 基礎統計量

本研究の統計分析にはHAD ver.16.057(清水, 2016)を使用した。表1は、達成目標志向性の下位尺度ごとの平均と標準偏差を示したものである。また、表2は家族、先生、友人のサポート源ごとのソーシャルサポートの各下位尺度の平均と標準偏差、表3は、ストレス関連成長の下位尺度ごとの平均と標準偏差を示している。

### 変数の要約法

ソーシャルサポートの下位尺度得点に対して、因子分析(最尤解, プロマックス回転)を行った(表4)。

表1 達成目標志向性の平均と標準偏差 (N=174)

	熟達	遂行	回避
M	18.7	21.9	9.3
SD	2.8	4.7	1.8

表2 ソーシャルサポートの平均と標準偏差 (N=174)

	家族				先生				友人			
	合計	道具的	情緒的	共行動的	合計	道具的	情緒的	共行動的	合計	道具的	情緒的	共行動的
M	58.5	23.0	15.9	19.6	51.9	23.9	14.6	13.5	65.2	25.2	17.3	22.7
SD	11.2	4.9	3.4	4.1	11.6	4.9	3.9	4.0	9.5	4.8	2.8	2.8

表3 ストレス関連成長の平均と標準偏差 (N=174)

	合計	他者との関係	新たな可能性	人間としての強さ
M	55.6	25.0	16.1	14.5
SD	14.1	6.7	4.5	4.4

その結果、固有値及び固有値の落差から3因子が抽出された。第1因子を家族サポート、第2因子を先生サポート、第3因子を友人サポートと名付けた。なお累積寄与率は82.4%であった。下位尺度ごとのクロンバックの $\alpha$ 係数を求めると、家族サポートは.87、先生サポートは.89、友人サポートは.86であり、高い内的整合性が得られた。そこで本研究ではソーシャルサポートについて、家族・先生・友人のサポート源ごとの下位尺度得点を用いて分析を行う。

相関分析

表5に達成目標志向性、ソーシャルサポート、ストレス関連成長の各下位尺度間の相関係数を示す。「他者との関係」と他のすべての下位尺度間で弱い～中程度の正の相関がみられた。また「新たな可能性」では

課題回避目標以外の下位尺度間で弱い～中程度の正の相関がみられた。「人間としての強さ」においては遂行目標、課題回避目標以外の下位尺度間で弱い正の相関がみられた。

階層的重回帰分析

達成目標志向性とソーシャルサポート及び達成目標志向性とソーシャルサポートの交互作用項を説明変数、ストレス関連成長(合計)及び下位尺度を目的変数とした階層的重回帰分析を行った(表6)。Step1では、統制変数として大学、入試区分、性別を投入した。入試区分については、総合型選抜(AO)、一般推薦入試、指定校推薦等の早い段階で合否が決まる入試区分とセンター利用入試、一般入試(前期・後期)等の2群に分類した。Step2では達成目標志向性、Step3ではソーシャルサポートを投入した。Step4では達成目標志向性とソーシャルサポートの交互作用項を投入した。

ストレス関連成長(合計)を目的変数としたところ、回帰式は有意であり( $F(19,152) = 5.58, p < .01$ )、決定係数( $R^2$ )は.41とストレス関連成長をよく説明していた。Step1では、回帰式は有意であり( $F(4,167) = 3.52, p = .009$ )、入試区分の主効果も有意であった。Step2では $\Delta R^2$ が有意であった( $\Delta R^2 = .14, F(7,164) = 6.69, p < .001$ )。達成目標志向性では熟達目標の主効果が有意であった。Step3では $\Delta R^2$ が有意であった( $\Delta R^2 = .15, F(10,161) = 9.51, p < .001$ )。ソーシャルサポートでは家族サポート、先生サポート、友人サポートにおいて有意であった。Step4では $\Delta R^2$ が有意であった( $\Delta R^2 = .04, F(19,152) = 5.58, p < .001$ )。

表4 ソーシャルサポートの因子分析の結果

下位尺度	家族サポート	先生サポート	友人サポート	共通性
家族-道具	.99	-.04	-.05	.92
家族-情緒	.83	.07	.04	.74
家族-共行動	.73	-.01	.02	.54
先生-道具	-.05	.90	.03	.81
先生-情緒	.05	.93	.00	.89
先生-共行動	.02	.74	-.02	.55
友人-道具	.06	-.07	.91	.84
友人-情緒	.04	.01	.88	.81
友人-共行動	-.10	-.06	.79	.60
説明分散				7.41
説明率				82.4

表5 各尺度間の相関行列

	達成目標志向性			ソーシャルサポート			ストレス関連成長		
	熟達	遂行	回避	家族	先生	友人	他者との関係	新たな可能性	人間としての強さ
達成目標志向性									
熟達	1.00								
遂行	.25**	1.00							
回避	.17*	.34**	1.00						
ソーシャルサポート									
家族	.18*	.11	.14 <sup>+</sup>	1.00					
先生	.19*	.09	.08	.15 <sup>+</sup>	1.00				
友人	.24**	.25**	.21**	.38**	.29**	1.00			
ストレス関連成長									
他者との関係	.32**	.23**	.17*	.36**	.33**	.55**	1.00		
新たな可能性	.42**	.15*	.04	.25**	.32**	.33**	.71**	1.00	
人間としての強さ	.28**	.11	-.02	.25**	.21**	.25**	.69**	.76**	1.00

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , <sup>+</sup> $p < .10$

表6 ストレス関連成長を目的変数とする階層的重回帰分析

	ストレス関連成長	他者との関係	新たな可能性	人間としての強さ
Step1				
入試区分	-.22**	-.19*	-.12	-.29**
B大学	.12	.17*	.09	.03
C大学	.03	.08	.00	-.01
性別	-.11	-.09	-.06	-.14 <sup>+</sup>
Step2				
熟達	.35**	.27**	.42**	.27**
遂行	.10	.13 <sup>+</sup>	.06	.07
回避	-.01	.09	-.06	-.10
Step3				
家族	.16*	.17*	.11	.14 <sup>+</sup>
先生	.15*	.12 <sup>+</sup>	.20**	.08
友人	.28**	.39**	.17*	.13
Step4				
熟達 × 家族	-.12	-.14 <sup>+</sup>	-.08	-.09
熟達 × 先生	.11	.07	.12	.13
熟達 × 友人	.04	.00	.04	.09
遂行 × 家族	.08	.04	.06	.12
遂行 × 先生	.10	.03	.16 <sup>+</sup>	.11
遂行 × 友人	-.15	-.12	-.23*	-.08
回避 × 家族	.01	.05	-.04	.02
回避 × 先生	-.09	-.10	-.10	-.03
回避 × 友人	.11	.10	.15	.04
$R^2$	.41**	.45**	.37**	.29**

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , <sup>+</sup> $p < .10$

入試区分は総合型選抜 (AO)、一般推薦入試、指定校推薦等の早い段階で合否が決まる入試区分、大学はA大学、性別は男性を基準としている。

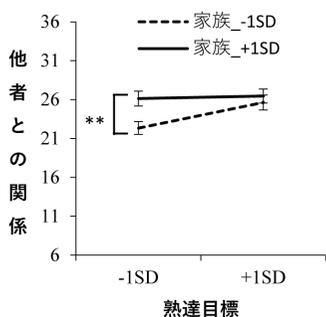


図1 熟達目標と家族サポートの単純傾斜分析

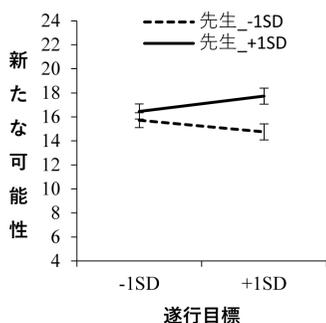


図2 遂行目標と先生サポートの単純傾斜分析

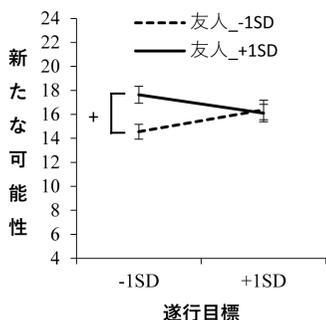


図3 遂行目標と友人サポートの単純傾斜分析

達成目標志向性とサポートの交互作用項においては、いずれも有意ではなかった。

ストレス関連成長の下位尺度「他者との関係」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果、回帰式は有意であり ( $F(19,152) = 6.64, p < .01$ ), 決定係数 ( $R^2$ ) は .45とストレス関連成長の「他者との関係」をよく説明していた。Step 1では、回帰式は有意であり ( $F(4,167) = 3.55, p = .008$ ), 入試区分、B大学の主効果が有意であった。Step 2では  $\Delta R^2$  が有意であった

( $\Delta R^2 = .12, F(7,164) = 6.00, p < .001$ )。達成目標志向性では熟達目標の主効果が有意であり、遂行目標の主効果が有意傾向であった。Step 3では  $\Delta R^2$  が有意であった ( $\Delta R^2 = .21, F(10,161) = 12.0, p < .001$ )。ソーシャルサポートでは家族サポートと友人サポートにおいて有意であり、先生サポートにおいて有意傾向であった。Step 4では  $\Delta R^2$  が有意であった ( $\Delta R^2 = .01, F(19,152) = 6.64, p < .001$ )。達成目標志向性とサポートの交互作用項においては、熟達目標と家族サポートとの交互作用項において有意傾向がみられた。

達成目標志向性とサポートの交互作用項が有意傾向であることが確認されたため、単純傾斜分析を行った。変数の基準は、平均  $\pm 1SD$  を使用した。図1は熟達目標と家族サポートの単純傾斜分析の結果を示したものである。熟達目標と家族サポートにおいては、熟達目標が低い人に家族サポートがあるとストレス関連成長につながっていたが、家族サポートがないとストレス関連成長につながっていなかった。

次にストレス関連成長の下位尺度「新たな可能性」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果、回帰式は有意であり ( $F(19,152) = 4.62, p < .01$ ), 決定係数 ( $R^2$ ) は .37とストレス関連成長の「新たな可能性」をよく説明していた。Step 1では、回帰式は有意であったが ( $F(4,167) = 1.27, p = .284$ ), いずれの主効果も有意ではなかった。Step 2では  $\Delta R^2$  が有意であった ( $\Delta R^2 = .19, F(7,164) = 6.23, p < .001$ )。達成目標志向性では熟達目標の主効果が有意であった。Step 3では  $\Delta R^2$  が有意であった ( $\Delta R^2 = .09, F(10,161) = 7.11, p < .001$ )。ソーシャルサポートでは先生サポートと友人サポートにおいて有意であった。Step 4では  $\Delta R^2$  が有意であった ( $\Delta R^2 = .06, F(19,152) = 4.62, p < .001$ )。達成目標志向性とサポートの交互作用項においては、遂行目標と先生サポートとの交互作用項で有意、遂行目標と友人サポートとの交互作用項で有意傾向がみられた。

図2は遂行目標と先生サポートの単純傾斜分析の結果を示したものである。遂行目標と先生サポートにおいては、遂行目標が高い人に先生サポートがあるとストレス関連成長につながっていたが、先生サポートがないとストレス関連成長につながっていなかった。図3は遂行目標と友人サポートの単純傾斜分析の結果を示したものである。遂行目標と友人サポートにおいては、遂行目標が低い人に友人サポートがあるとストレス関連成長につながっていたが、友人サポートがないとストレス関連成長につながっていなかった。

最後にストレス関連成長の下位尺度「人間としての強さ」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果、回帰式は有意であり ( $F(19,152) = 3.28, p < .01$ ), 決定係数 ( $R^2$ ) は .29とストレス関連成長の「人間としての強さ」をよく説明していた。Step 1では、回帰式は有意であったが ( $F(4,167) = 4.95, p = .001$ ), いずれの入試区分の主効果が有意、性別の効果が有意傾向であった。Step 2では  $\Delta R^2$  が有意であった ( $\Delta R^2 = .19, F(7,164) = 5.46, p < .001$ )。達成目標志向性では熟達目標の主効果が有意であった。Step 3では  $\Delta R^2$  が有意であった ( $\Delta R^2 = .05, F(10,161) = 5.08, p < .001$ )。ソーシャルサポートでは家族サポートにおいて有意傾向であった。Step 4では  $\Delta R^2$  が有意であったが ( $\Delta R^2 = .05, F(19,152) = 3.28, p < .001$ ), 達成目標志向性とサポートの交互作用項はいずれも有意ではなかった。

## 考 察

本研究では大学1年生を対象に5月～6月に質問紙調査を行い、大学受験期における達成目標志向性とソーシャルサポートがストレス関連成長に及ぼす影響について検討した。達成目標志向性が大学受験期のストレス関連成長に与える影響については、竹ノ内他(2020)と同様に熟達目標で主効果が見られた。ストレス関連成長はもがきや葛藤の結果生じるといわれており(宅, 2010), 熟達目標の人は課題の熟達や上達に向けた目標を持つ(中間, 2016)ため、大学受験においてももがきや葛藤が生じやすく、ストレス関連成長につながったと考えられる。また、竹ノ内他(2020)と同様に遂行目標、課題回避目標において主効果は見られなかった。遂行目標は他者との相対的な比較により高い能力や評価の獲得を目指すもの(中間, 2016)であり、課題回避目標は最小限の努力によって課題からうまく逃れ、学習状況からの回避を目指すものである(光浪, 2010)。これらの目標志向性を持っている人は、大学受験においてももがきや葛藤が生じにくく、ストレス関連成長につながりにくかったと考えられる。本研究、竹ノ内他(2020)いずれにおいても、熟達目標がストレス関連成長につながっており、遂行目標及び課題回避目標ではストレス関連成長につながりにくかった。つまり、ストレス関連成長につながりやすい達成目標志向性とストレス関連成長につながりにくい達成目標志向性があると考えられる。

ソーシャルサポートが大学受験期のストレス関連成

長に与える影響については、家族、先生、友人すべてのサポート源において、主効果が見られた。ストレス関連成長の下位尺度ごとの分析でも「新たな可能性」における家族サポート、「人間としての強さ」における先生サポート・友人サポート以外の箇所では主効果がみられている。ソーシャルサポートはストレス関連成長に影響を与えるものとして多くの研究で指摘されており(Schaefer & Moos, 1992; 兪・吉村・松井・丸山, 2017; Colhoun & Tedeschi, 2006 宅・清水 監訳, 2014; Prati & Pietrantonio, 2009), 本研究や竹ノ内他(2020)においても、先行研究同様の結果が得られた。

ストレス関連成長の下位尺度ごとの分析で、「他者との関係」ではすべてのサポートの主効果が見られた。他者との関係は「苦しいときに助けてくれた人がいたならば、自分は一人ぼっちではないんだということがより強く感じられる」「自分が困ったときやつらいときは、他の人を頼りにしていいんだ」といったような、他の人とのつながりの中で経験される変化の領域(宅, 2014)である。「他者との関係」は特に周囲の人との関係が関連する成長の領域であったため、すべてのサポート源のサポートが有効であったと考えられる。一方「新たな可能性」や「人間としての強さ」については、「傷つきやすいが思っていたよりも自分は強い」といったような自己認識の変化である(宅, 2014)。そのため、「他者との関係」よりもサポートの主効果が見られる箇所が少なかったと考えられる。しかし、「新たな可能性」における先生サポート、友人サポート、「人間としての強さ」における家族サポートでは主効果が見られており、自己認識が変化するという成長の領域でもソーシャルサポートが有効であると考えられる。

達成目標志向性とソーシャルサポートの交互作用項においては、熟達目標と家族サポートの交互作用で熟達目標が低い人に家族サポートがあるとストレス関連成長の「他者との関係」につながっていた。また、遂行目標と先生サポートにおいては遂行目標が高い人で先生サポートがあるとストレス関連成長の「新たな可能性」につながっていた。遂行目標と友人サポートの交互作用項においては、遂行目標が低い人に友人サポートがあるとストレス関連成長の「新たな可能性」につながることが示された。達成目標志向性によって有効なサポートが異なるといえる。

「他者との関係」において、熟達目標が高い人は家族からのサポートの有無に関わらず、ストレス関連成長につながっていた。熟達目標が高い人は課題の熟達や

上達に向けた目標を持つ（中間，2016）ため、もがきや葛藤が生じやすく、それを乗り越えようとする際に援助を依頼するなどの親密度や人とのつながりが増す経験があると考えられる。そのため「他者との関係」という成長につながっていると考えられる。一方、熟達目標が低い人はサポートを受けることで、熟達目標が高い人と同程度のストレス関連成長につながっていた。対人関係能力の志向性に社会的達成目標がある（Ryan & Shim, 2006）。その中の社会的発達目標（social development goal）は、「学業領域における熟達目標と同様に、自身の対人関係場面の能力を発展させ、改善していこうとする志向性である」（篠原，2017）。親のサポーティブな養育態度が、社会的達成目標志向性に影響を与え、それが友人関係に影響を与えている可能性が示唆されている（篠原，2017）。そのため、熟達目標が低くても家族サポートがあれば、「他者との関係」という成長につながったと考えられる。

次に「新たな可能性」において遂行目標の高い人に先生サポートがあることで、ストレス関連成長につながった。遂行目標志向性の人は自分の有能さを誇示しポジティブな評価を得ようとする（中間，2016）。そのため大学受験においてライバル関係となる友人に比べると、立場が異なる先生からのサポートを受けやすかったと考えられる。「新たな可能性」はその出来事なしではありえなかったような新しい何かが発生する（宅，2014）ことである。大学受験において生徒に進路に関する新しい情報や大学に関する情報の提供は家族や友人よりも先生が多いと考えられ、先生のサポートが有効であったと考えられる。

また、「新たな可能性」において遂行目標の低い人は友人サポートがあるとストレス関連成長につながるが、友人サポートがないとストレス関連成長につながらなかった。遂行目標の低い人は友人との比較をあまりしないため、友人と学習面でも協力関係を築けることでともに大学受験を乗り越えていく仲間となり、ストレス関連成長につながったと考えられる。

本研究と竹ノ内他（2020）では達成目標志向性とソーシャルサポートの交互作用で効果が見られる箇所が異なった。これは、質問紙調査の実施時期が関連していると考えられる。大学受験は自分が直接関与する出来事である。直接関与している場合、時間がたってからその時の自分自身を振り返り、評価し直すことで自分の経験が今の自分につながっている面があることに気づき、ストレス関連成長が高くなる（宅，2014）。竹ノ内他（2020）では大学1，2年生の10月に調査を

行ったため、自分を振り返り再評価する時間があつたと考えられる。また、本研究の調査を実施した2020年5月～6月は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため遠隔授業（WEB授業）が行われていた時期でもあつた。そのため大学への不適応感など他の要因が関連していることも考えられる。

本研究の結果から、大学受験期における達成目標志向性にはストレス関連成長に影響を与えるものと与えないものがあることが示された。しかし、ストレス関連成長につながりにくい達成目標志向性を持っていたとしてもソーシャルサポートがあることでストレス関連成長に影響を与えることが示された。また、達成目標志向性によって有効なソーシャルサポートが異なることも示された。

しかし、本研究では竹ノ内他（2020）の交互作用の差がなぜ生じたのかを確認することができていない。そこで今後の課題として、交互作用の変化が時期や学年が要因となっているかを検証するために、同じ調査協力者を追跡しながら大学受験を経験したばかりの大学入学直後と時間を空けた時期に、大学への満足感や大学への不適応感も考慮して、調査を行うことが挙げられる。また、本研究では大学受験期の達成目標志向性とソーシャルサポートがストレス関連成長につながる過程を明らかにできていない。そのため、大学1年生に面接調査を行い、大学受験期の達成目標志向性とソーシャルサポートがストレス関連成長につながる過程を検討する必要がある。

## 引用文献

- Ames, C., & Archer, J. (1988). Achievement goals in the classroom: Student's learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology, 80*, 260-267.
- Colhoun, L. G. & Tedeschi, R. G. (2006). *Handbook of Posttraumatic Growth – Research and Practice*, London, UK: Routledge (カルホーン, L. G.・テデスキ, R. G. 宅 香葉子・清水 研 (監訳) (2014) 心的外傷後成長ハンドブック：耐え難い体験が人の心にもたらすもの 医学書院)
- Elliot, E. & Dweck, C. S., (1988). Goals: An approach to motivation and achievement. *Journal of personality and Social Psychology, 54*, 5-12.
- 福岡 欣治 (2019). 親との関係性および親になることに対する意識が大学生の性に対する態度に及ぼす影

- 響 川崎医療福祉学会誌 29, 147-151.
- 久田 満 (1987). ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究, 20, 170-179.
- 細田 絢・田島 誠一 (2009). 中学生におけるソーシャルサポートと自己への肯定感に関する研究 教育心理学研究 57, 309-323.
- 堀井 順平 (2018). 大学生の大学受験の捉え方と自己効力感の関連 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部 67, 39-46.
- 飯村 周平 (2016a). 心的外傷後成長の考え方ー人生の危機とポジティブな心理的変容ー ストレスマネジメント研究, 12, 54-65.
- 飯村 周平 (2016b). 高校受験期に生じるストレス関連成長ーパーソナリティ特性と知覚されたサポートー 教育心理学研究, 64, 364-375.
- 川原 誠司 (1994). 子どもを対象としたソーシャルサポート研究の動向 東京大学教育学部紀要, 34, 245-253.
- 厚生労働省 (2014). 平成26年度全国家庭児童調査結果の概要 [https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000188147\\_00002.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000188147_00002.html) (2020年1月29日閲覧)
- 前田 由貴子・大島 叶・佐藤 寛 (2017). 大学生のQOLに及ぼすコミュニケーションスキルとソーシャルサポートの影響 大阪国際大学紀要国際研究論叢 30, 147-155.
- 光浪 陸美 (2010). 達成動機と目標志向性が学習行動に及ぼす影響 教育心理学研究, 58, 348-360.
- 三浦 麻子・小林 哲郎 (2015). オンライン調査モニターの satisfice はいかに実証的知見を毀損するか 社会心理学研究, 31, 120-127.
- 文部科学省 (2020a). 18歳人口及び高等教育機関への入学者・進学率等の推移 [https://www.mext.go.jp/content/20201209-mxt\\_daigakuc02-100014554\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201209-mxt_daigakuc02-100014554_2.pdf) (2021年1月31日閲覧)
- 文部科学省 (2020b). 学校基本調査/年次統計 就園率・進学率の推移 <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/file-download?statInfId=000031852308&fileKind=2> (2021年1月8日閲覧)
- 文部科学省 (2020c). 平成31年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/2020/1414952\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2020/1414952_00001.htm) (2021年1月27日閲覧)
- 村山 航 (2003). 達成目標理論の変容と展望ー『緩い統合』という視座からのアプローチー 心理学評論, 46, 564-583.
- 中間 玲子 (編) (2016). 自尊感情の心理学 理解を深める「取り扱い説明書」, 金子書房
- Nicholls, J. G., Patashnic, M., & Nolen, S. B. (1985). Adolescents' theories of education. *Journal of Educational Psychology*, 77, 683-692.
- 小山 秀樹 (2000). 大学受験生のストレス反応に関する研究: 受験生に有意差が見られるストレス反応の項目について 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 473.
- 小山 秀樹 (2001). 大学受験生のストレス反応に関する研究: 大学受験ストレス反応尺度と大学受験ストレスナー尺度の作成 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 153.
- 小山 秀樹 (2003). 大学受験生の受験に対する認知に関する研究: 受験生が考える大学受験のプラス面 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 489.
- Park, C. L., Cohen, L. H., & Murch, R. L. (1996). Assessment and prediction of stress related growth. *Journal of Personality*, 64, 71-105.
- Prati, G., & Pietrantonio, L. (2009). Optimism, social support, and coping strategies as factors contributing to posttraumatic growth: A meta-analysis. *Journal of loss and trauma*, 14, 364-388.
- Ryan, A. M., & Shim, S. S. (2006). Social achievement goals: The nature and consequences of different orientations toward social competence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 1246-1263.
- Schaefer, J. A., & Moos, R. H. (1992). Life Crises and Personal Growth. In B. N. Carpenter (Ed.), *Personal Coping: Theory, research, and application* (pp.149-170). Westport, CT: ABC-CLIO.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究 1, 59-73.
- 篠原 由花 (2017). 社会的達成目標に関する研究動向 人文, 15, 133-144.
- 竹ノ内 歩加・原口 雅浩・江村 理奈 (2020). 大学受験期における達成目標志向性とソーシャルサポートがストレス関連成長に及ぼす影響 久留米大学心理学研究, 19, 33-41.
- 宅 香菜子 (2010). がんサバイバーの Posttraumatic Growth 腫瘍内科, 5, 211-217.
- 宅 香菜子 (2014). 悲しみから人が成長するときー

PTG 風間書房

浦 光博 (1992). 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学 (セレクション社会心理学 8) サイエンス社

上淵 寿・川瀬良美 (1995). 目標理論 宮本美沙子・奈須正裕 (編著) 達成動機の理論と展開: 続・達成動機の心理学 第 8 章 (pp.187-215) 金子書房

浦崎 貴大・森川 友子 (2019). 過去のストレス体験におけるサポート認知と意味づけおよび外傷後成長との関連 人間科学, 1, 27-37.

兪 善英・吉村 健太郎・松井 豊・丸山 晋 (2017). 東日本大震災の被災地に派遣された消防職員のストレス症状と外傷後成長 心理学研究, 87, 644-650.

## **Influences of achievement goal approach and perceived social support affected stress-related growth in students through their experience when taking university entrance examinations.**

-Quantitative research-

AYUKA TAKENOUCHI (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

MASAHIRO HARAGUCHI (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

RINA EMURA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

### **Abstract**

This study investigated how possessing an achievement goal approach and perceived social support affected stress-related growth in students by evaluating their experience when taking university entrance examinations. A total of 243 first-year university students completed a questionnaire that included questions on their achievement goal approach, social support, and stress-related growth. Hierarchical multiple regression analysis revealed that interaction between mastery goals and support from family was significantly associated with relating to others, a subscale of stress-related growth. Significant interactions pertaining to new possibilities, also a subscale of stress-related growth, were observed between performance goals and support from teachers, and between performance goals and support from friends. These observations indicate that different goals require different types of social support in order to achieve stress-related growth for university entrance examinations.

**Keywords:** stress-related growth, achievement goal approach, social support